

あたまを耕すー6

またまたご無沙汰してすみません。2学期に始まった哲学史の授業は、時間数が少ないので、こういうプリントで補いたいと思うのですが、いざ書くとなくなるとかなりのエネルギーがいるのです・・・。

哲学、哲学と言っているけど、この言葉を聞いて、「ああ、あのことか」と合点がいく人はおそらく一人もいないのではないかと推察します。かく言う私も、神父になって勉強するまでは、「哲学」とはいったい何のことか心得はありませんでした（簡単に言うと「知らなかった」ということ）。ヨーロッパでは中学や高校で哲学の授業があるそうですが、日本には哲学の伝統がないので、これは仕方がないことだと思います。そこで、もう一度、簡単に復習しておくのも意味のないことではない（簡潔に言えば、「意味がある」ということ）と思います。

哲学という学問は、古代ギリシアで生まれた。しかし、最初は「哲学」という言葉はなかった。ミレトス（今ではトルコにある）のタレスという人たちが「万物の根源は何か」という問題をたてて、それを理路整然と考えていこうとしたことが始まりでした。この作業がどのように展開するのかを授業で教えたいのですが、端折って言いますと、「ああでもない、こうでもない」と喧々（けんけん）がくがくの議論が続くうち、ギリシア哲学が形を整えていくわけです。



1 哲学の道、京都の名所。西田幾多郎がよく散歩したのでこの名前がある。

いずれにしても、古代ギリシアに「万物の根源は何か」と問うことを人生の重要課題だと思った人たちが出た。このような人を見て、「なんや、何の役に立たんことを一生懸命にやってはる。変わったお方や」とせせら笑う人もいたが、他方、「彼らはお金のためでも、名誉のためでも、快樂のためでもなく、ただ真理を知りたいという態度で学問をしている。あの人たちのしていることは智恵 (sophia) を愛する (philo) ことだ」と感心して、この営みを philo-sophia と呼ぶようになったのです。この言葉が明治時代に「哲学」と訳されたわけです。（ついでながら、日本語で「博愛」と訳されている言葉は、philanthropy ですが、これも anthropo (人間) を (philo) 愛するといふ意味です)。

言ってみれば自然発生的に始まったこの営みが、やがて体系づけられて学問となって行きます。それに大きな貢献をしたのが、ソクラテス、その弟子プラトン（前 427~347 年）、その弟子アリストテレスの三人です。これをギリシア哲学と言います。言っておきますが、哲学はここで完成したわけではありません。哲学（根源を求める営み）は果てしのない営みですから。今、世界遺産ということがかまびすしい（簡単に言うと、盛んに話されているということ）ですが、ギリシア哲学も非常に貴重な人類の遺産の一つと言えます。後の西洋の学問はここから生まれ、また西洋の思想の歴史はこのギリシア哲学とキリスト教の教えの上に、時にはそれらの延長として、時にはそれらに反発しながら、展開していくのです。そして、この思想の影響は、良きにつけ悪きにつけ今では全世界に広がっています。だから、ギリシア哲学とその後の西洋哲学、そしてキリスト教を中高生の間に勉強しておくのは必要なことだと思います。

では、哲学とは何を勉強するものなのでしょうか。ある学問がどんな学問かを定義するためには、二つの点を見る必要がある。一つは「何を勉強するか」。もう一つは「どんな視点から勉強するか」です。例えば、歴史も医学も人間を研究しますが、歴史は人間が過去にどうしたことかを焦点を当て、医

学は健康という点から人間の体と心に焦点を当てると言うふうに、第一の点（何を勉強するか）は同じでも、第二の点が異なると別の学問になるのです。さて、第一の点に関しては、先ほど言った「哲学は万物の根源を探し求めることから始まった」というところに答えがあります。すなわち、哲学は万物、すべてのものを対象とする学問です。「でも、すべてのもの」ってなんでしょう。すべてのものとは、「存在するものすべて」のことです。「存在するもの」の外には何も無い。「無」は存在しません。それゆえ「無」について考えられないのです。

ここが哲学の変わっている点で、みんなはきっとここに引っかかると思います。というのは、今までみんなが勉強してきた学問は、すべて個別学問といって、「存在するものすべて」ではなく、たとえば物理なら「物質を持つもの」、生物なら「生命と関係のあるもの」、歴史なら「過去の人間の営み」というふうに対象を限っているのです。別の言い方をすると、物理では「物質を持たないもの」、たとえば言葉、思想などを研究の対象にしません。歴史は直接には物質の構造や法則を研究しません。それに対して、哲学はすべてを考察の対象にするのです。

第二の点、「どんな観点から勉強するか」を問うなら、哲学は「すべてのものを、最も本質的な面において考える学問」と言うことができます。個別学問は、いくらかの前提から出発するのですが、哲学はその前提を問題にするのです。たとえば、歴史は「過去の人間の営み」を探っていくのですが、この場合、基本的な前提は「人間とはなにか」という問題です。しかし歴史はそれを考えないままに研究を進めます。そこで、「人間は自由な存在だ」と考える歴史家と、「人間は物質であって自由ではない」と考える歴史家がいる、それぞれの信念に従って歴史を解明しようとするので、同じ事実を解釈する場合もその結論は大いに異なることがあります。だからまず「人間は自由なのか、そうでないのか」という問題をはっきりさせておかないといけないのですが、それは哲学がすることなのです。

哲学が、全体を最も本質的な面において説明しようとするものということは、逆に言うと、哲学はすぐに何かに役に立つものではないということです。例えば、ロケットを作って惑星に到着させるためには、哲学をしてもだめで、物理学を勉強しないといけません。だから大学で哲学を勉強しても就職がほとんどないのです。でも、哲学をすることは、世界と人間の何たるかを考えることになります。古代ギリシア時代から現代までにどんな人がどんなことを考えたのかを知るのは、君たちの人生観や世界観を作るために、また色んな考えを整理するのにも、あるいは誤った軽薄な思想に汚染されないためにも役に立つと思います。

この「役に立つ、立たない」ということについて一言。日露戦争の時に、あるカトリックの司祭も召集されて満州に行きました。奉天という町の近くを行軍中、道路わきに立てられていた高札を何の気なしに読んだら、それはラテン語で書かれていて、何月、何日、何時、何分にこの鉄橋を爆破せよとの命令文で、ちょうどその時刻に日本軍を乗せた列車が通過する予定でした。そこでその神父様は上官に報告して、そのおかげで何百人かの日本兵の命を救ったのです。ロシア兵は日本軍の中にはラテン語を理解できるものはいないと信じていたようです。「ラテン語など、もうとっくの昔に死語になっている言葉を勉強して、何の役に立つのか」と言う人もいますが、何がいつどこで役に立つかはわかりません。あらゆる勉強は、きっといつか何らかの形で役に立つことを忘れず、すべての授業に真剣に取り組んで欲しいです。

2015年12月4日